

## 基幹型共同研究プロジェクト

### 「多文化共生社会における日本語教育研究」

#### 学習者コーパスと日本語教育研究

迫田 久美子

#### 《研究の概要》

「多文化共生社会における日本語教育研究」のプロジェクトでは、「学習者コーパスの構築と日本語の第二言語習得研究」と「定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究」の2つのテーマを中心に研究を行っている。いずれも日本語学習者のコミュニケーション場面を調査し、彼らに求められる日本語の運用能力、習得のプロセス、言語使用と環境の関係や言語使用と社会背景の関係等を追究している。

ここでは、特に「学習者コーパスの構築と日本語の第二言語習得研究」に焦点をあて、近年行った研究や活動について述べる。

日本語の学習者コーパスは、その数も少なく、作文データが中心であり、話し言葉や縦断調査のデータは少ない。また、個々の研究データが公開されていても、日本語能力のレベルが不明であれば、比較することは難しい。

そこで、本研究では、異なる12言語を母語とする海外19地域の日本語学習者及び国内の日本語学習者の言語（作文・発話）コーパスを構築することを目的の1つとする。さらに、このコーパスに基づき、日本国内か海外か、教室指導か自然習得か、等の環境要因、および彼らの母語要因を設定し、日本語学習者の習得にかかわる諸問題を検討することをもう1つの目的としている。

共同研究者 30名（プロジェクト全体）

#### 《主要な成果物》

##### 【著書】

迫田久美子（2012）「非母語話者のコミュニケーションの工夫」野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』105-124.東京：くろしお出版

##### 【論文】

Srdanović, I. and Sakoda, K., (2013) Analysis

of learner's production of adjectives using the Japanese language learner's corpus C-JAS: the case of *takai*, *Acta Linguistica Asiatica*, Vol. 3, No. 2, 9-24.

##### 【辞書】

Sakoda, K. (forthcoming) Error analysis and strategies by learners of Japanese as a second language, Minami, M. (Ed.) *Handbook of Japanese applied linguistics Vol. 11*. Berlin/ Boston: De Gruyter Mouton.

##### 【電子成果物・データベース】

迫田久美子, 木下藍子, 小西円, 李在鎬 (2103) 「中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断コーパス:中韓縦断コーパス (旧 C-JAS)」の一般公開

<https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/c-jas/web/>

#### 《特色ある活動》

##### 【NINJAL 国際シンポジウム】

2014年3月22日～23日 場所：国立国語研究所 第8回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ8)

招待講演者：Catherine E. Snow (Harvard Uni.)

企画パネル：テーマ「コーパスと日本語教育研究」

登壇者：小林典子, 渋谷勝己, 野田尚史, 迫田久美子

##### 【NINJAL フォーラム】

2013年3月10日 場所：一橋講堂

「グローバル社会における日本語のコミュニケーションー日本語を学ぶことはなぜ必要かー」

登壇者：鳥飼玖美子, 西原鈴子, 莫邦富, ダニエル・カール, 迫田久美子 司会：野田尚史 (359名)

##### 【共同研究プロジェクト シンポジウム】

2012年11月17日 場所：星陵会館ホール

「コミュニケーションのための日本語教育研究」

登壇者：清ルミ, 宇佐美まゆみ, 奥野由紀子, 山内博之, 徳井厚子, 品田潤子

コメントータ：春原憲一郎, 門倉正美, 奥田純子 (312名)

## 《何が分かったか、何が出来たか》

### 《何が分かったか》

#### ■日本語学習者の習得過程におけるストラテジー

日本語学習者の誤用は、効率よく習得しようとするための学習者のストラテジーである。

学習者はそれぞれのレベルにおいて、教師から学んだ規則とは異なった特有の方法で日本語を習得する。

例1 試験を受ける日が違うですよ、しかし韓国は、同じです全部、同じくて、試験も同じです

具体的には、例1のような「違う」や「同じ」の活用を別の語と同様に活用させる「単純化」であったり、「だと思う」「がある」で「固まり」を作ってしまう「書くことがあまりないだと思う」のように誤用を生んだりする場合である。また、「できる」「ほしい」「じゃない」などは、意味を担う「マーカ―」として、「貿易会社、建て、ほしい（→建てたい）」のように用いられる。また、英語母語話者が「姉はにこ（→二人の子）がいます」のように母語の影響で産出する誤用も見られる。

#### ■日本語学習者の異なる誤用と共通の誤用

指導の環境の違いや母語の影響によって異なる誤用もあれば、共通に観察される誤用もある。

例3は教室環境学習者の発話例で、動詞の活用を意識してモニターを働かせていることが分かる。

例3 もし、日本に一行ければ、うん、友だちと二人、二人は、あ、行こうと思い、思います、思いですけど・・・行こうと思いますけど（教室環境話者）  
一方、自然環境学習者は文法形式に注意を向けるよりも、省略させる傾向が見られる。

例4 日本人：Aちゃんは（辛い物）食べる？

学習者：Aちゃん、じゃない（自然環境話者）

共通点としては、接続助詞「て」の多用や固まりなど、前項のストラテジーは、環境の違いに関わらず観察される。

#### ■日本語の第一言語と第二言語習得の類似点

第二言語学習者にも母語の第一言語の習得にも観察されるストラテジーがある。

それは、固まりで覚えるストラテジーや例5のように、古い形に新しい要素を加えて言語を習得していくストラテジーである。

例5 L2の場合 食べ→食ベタデス→食ベタンデス

L1の場合 食べる→食べるノ→食べるノヨ

## 《何が出来たか・出来ているか》

### ■中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断コーパス（旧 C-JAS）

中国語母語話者3名、韓国語母語話者3名の発話を3年間に渡って調査収集。約87万語、46.5時間分の対話データで、誤用と形態素検索のシステムを持つ。本日、示した誤用例の多くは、このコーパスを活用。

### ■多言語母語の日本語学習者横断コーパス

2013年から2014年に12の異なる母語の日本語学習者を対象として、19の地域で発話・作文データを調査・収集する。具体的には、中国語、韓国語、英語、タイ語、トルコ語、ドイツ語、フランス語、ハンガリー語、インドネシア語、ベトナム語、ロシア語、スペイン語を対象とし、海外の各大学における日本語学習者50名前後に調査を実施している。

このコーパスの特徴は、従来の日本語学習者のコーパスと比べ、母語の異なりが広いこと、被験者数が多いこと、日本語能力レベルに関して、全員が2種類の同じテストを受けること、学習者の背景が詳細であることである。

調査内容は、次のようなタスクで構成されている。

- (1) ストーリーテリング 4~5コマの絵を見て、その物語の内容を考え、発話する。
- (2) 対話（30分）ある程度構成された話題を盛り込んで、日本人の調査者とおしゃべりをするように会話を進める。（対話の仕方をできるだけ均質にするために、調査者全員、専門家を招いて事前に研修を行った。）
- (3) ロールプレイ 「断り」と「依頼」に関するロールカードを用意し、調査者で行う。
- (4) 絵描写タスク 1枚の絵を見て、描写できることを発話。足りない場合は、調査者が質問して、抽出を試みる。
- (5) ライティング 最初のストーリーテリングのタスクを再度見せ、時間を10分程度与えて、パソコンか手書きで、内容を書く。

この後、学習者は筑波大学で開発されたJ-CATとSPOTという2つのタイプの日本語能力テストをパソコンによって受験する。

今年度末までに、11の地域の調査が終了し、今年度は残りの8つの地域の調査を実施する。また、国内の教室環境学習者と自然環境学習者の調査も実施予定である。